

鹿児島県立川内高等学校

校長通信

第5号 (令和8年6月17日/校長 大倉秀心)



校訓「自律 敬愛 剛健」

鹿児島県薩摩川内市御陵下町6番3号



電話 (0996) 23-7274

FAX (0996) 22-1542



高校総体県予選終了

高校総体の県予選が各競技で終わりました。各部活動の健闘に敬意を表したいと思います。部によっては納得いく結果を残せなかったという人もいられるかもしれませんが、部活動での経験はこれからの人生の中で皆さんを後押ししてくれることがきっとあると思います。「最後まで諦めない気持ち」「粘り強さ」「チャレンジ精神」「チームワーク」など、競技を経て身につけたものが競技以外の人生の局面で発揮されることが必ずあるのです。これこそ部活動の意義といってもいいでしょう。

私は大会役員の一人としてバスケットボール決勝リーグ最終戦を観戦しました。選手と同じフロアーレベルにいと、選手たちの視線の動きまでよく分かり、相手との駆け引きを間近に感じられ、改めてバスケットボールが「頭脳スポーツ」だということが分かりました。同時に、選手たちの身体能力の高さ、スピードや跳躍力、体の反転や3ポイントの正確性など、練習の賜物だろうと思える数々のプレーにただただ感銘を受ける次第でした。

応援の力

フロアーレベルで競技を見ていると、応援席からの声援も普段とは違って聞こえるのを感じました。自分が応援席にいる場合とは比較にならないくらい声援が波のように押し寄せてくるのを感じる。自校と相手校の声援がコート内でぶつかり合って選手たちを包み込んでいるような感じです。応援席に駆けつけた生徒の皆さんの大声援は、試合の流れが相手に行きかけたときや一気に点差を広げたいときなどに、本校の選手たちに大きなエネルギーを与えていたと思います。県大会優勝を川内高校の生徒みんなの力で勝ち取った、そんな気持ちにさせてくれる素晴らしい試合でした。表彰式で直接本校生に優勝の表彰状を渡すことができたことも

感無量でした。最後まで力の限りプレーした選手の皆さん、そしてその姿を応援席からサポートした生徒の皆さんの頑張りを大いに称えたいと思います。

「点差と残り時間」

バスケットボールのことを考えるといつも思い出すことがあるのです。

「点差と残り時間」

私が鶴丸高校に教諭として勤めていたときのことです。私は3年生の担任をしていました。川内高校と同様、文武両道を地で行く学校でしたので、生徒たちは勉強も部活動も一生懸命取り組んでいました。

高校総体も終わり、夏休みも過ぎ、体育祭も終わって前後期制の前期が9月に終了し、10月に入って後期が始まり秋の訪れを感じる頃、「三年生を激励する会(通称、三激会)」という行事がありました。

受験モードに突入して日々勉強に追われる3年生に、芸術鑑賞(古典芸能・音楽・演劇の年度ごとのローテーション)を通して一時の安らぎを提供し、同時に1・2年生が「受験勉強頑張ってください」という想いを込めた手紙を一人一人の3年生に渡すという行事でした。

その三激会の最後には、3年生を代表してお礼の言葉を述べる生徒が毎年壇上に上がるのですが、その年は私のクラスのバスケットボール部に所属していた女子生徒がその役を務めました。そのお礼の挨拶に出てきたのが先ほどの「点差と残り時間」という言葉なのです。

「普遍性」の発見

彼女は次のような趣旨の話をしました。

「バスケットボールの試合で、顧問の先生から注意されることがよくあった。『点差と残り時間が分かっているのか?』と。これはつまり、私たち選手がそれに見合ったプレーができていないということ。そんなプレーではこの残り時間でこの点差に追いつき逆転することなどできるはずがない。もっとアグレッシブにがむしゃらにいかねばだめだというメッセージだったと思う。

今、受験勉強一色になった生活で、よくこの言葉を思い出す。『点差と残り時間』を意識した学習が自分にできているのか、いつも考えている。

私にはセンター試験(現共通テスト)でとりたい点数がある。でも、今の学力ではその目標点数にはまだまだ及ばない。その点差をセンター試験当日までに埋められる学習を今しているのか。自分にそう問いかけながら毎日必死になって学習をしている。

そういう学習に向き合う考え方の基本を部活動を通して教えてくれた顧問の先生には感謝している。」

彼女の挨拶を聞きながら私は思いました。「頭のいい人は点と点を結びつけるのが上手いな」と。部活動で得た知恵を、部活動だけに留まらせるのではなく、即学習に結びつけている。一つの真理は違った場面でも応用できることを高校3年生にして身につけている。部活動を通して得た知恵をどう活用して自分の生き方に結びつけるか。そういう部分での彼女の成長が担任として何よりもうれしかったことが今でも忘れることができないのです。

部活動には部活動の、勉強には勉強のそれぞれ異なる頑張り方があるのではなく、物事には普遍性(すべての物事・場合に当てはまる性質)というものが存在していて、それを見つければ複雑化する世の中でもシンプルに対応できる。そういう人は頭がパンクして右往左往するようなこともなく、ブレずに生きていけるのではないかと思うのです。

学校行事が持つ意味

この「三激会」という学校行事、「三年生を激励する会」ですからスポットライトは3年生に当たっているように思われますが、私は1・2年生に対して「むしろ主役は君たちですよ」と言っていました。

3年生に対して「あなた勉強する人。私応援する人」みたいな単純な考え方をしてはいけない。3年生が秋を迎える頃に勉強を頑張るのは当たり前のこと。そしてその頑張る人たちにエールを送るのも、同じ集団の仲間として微笑ましいことかもしれない。しかし、もっと大事なことは、頑張る3年生の姿を見たり、想いを聞いたりすることで、1・2年生が何を感じ、何を考え、どんな行動変容を起こすのかではないのか。3年生を激励している自分の方が3年生から刺激をもらい、「私も頑張ろう!」という気持ちになり、新たな一歩を踏み出すことなのではないのか。このように1・2年生に話していました。

そうすると1・2年次から図書館や自習スペースを活用する生徒が増えてくるのです。「3年次の勉強=受験勉強」というのではなく、今学んでいること自体が受験勉強につながっているということをもっと実感する1・2年生が増えてくるからです。こういう集団が受験で好結果が出やすいことは言うまでもありません。

どんなに学力が高いと言われる学校でも、初めから勉強のできる生徒は存在しません。生まれつきの天才はいないのです。ただ、これだけは言えるかもしれません。「努力の天才」はいると。

一つ一つの学校行事からも何かしらの学びを得て、それを自分の成長に結びつけるために、正しい努力を正しい手順で粛々と進めていく。これができる生徒が多い集団が結果として高い確率で自分の目標を実現できると言えるのです。

これまで様々な高校の生徒と接してきましたが、川内高校の生徒の皆さんが他校の生徒に比べて劣っているなどと感じる部分は一つもありません。ただ、正しい努力を正しい手順で進めているかについては、まだ課題があるように見うけられます。一つ一つの学校行事からも学びが得られるような川内高校生に成長することを期待しています。